

かあさん

朝の通勤電車を降りて階段へ向かっていった法（みのり）は、急に胸が苦しくなり階段の側へうずくまった。

「いつもの発作だ」と思ってカバンから薬を出そうとするが手がのばせない。

その時、「どうしました。」といって青年がのぞき込んできた。

法はカバンを指でさした。青年は「開けていいんですネ。」といって素早く開けた。

法は薬の入っているポケットを指した。

「これですネ」といって青年は法の口へ入れてくれた。

法はほっとして目で礼を言った。そして青年はそばのベンチまで法を連れて行き立ち去った。

その夜、キッチンで身重の妻の良（りょう）と義母が、楽しそうに話しているのを聞いているうちにうとうととしてしまった。

ふと話し声で目が覚めると、側で二人が茶を飲みながらテレビを見て話している。

「遺伝子から見てもアフリカの女の人にまで溯るのねえ。」

「その人から生まれて今の人間がいるんだもの『人類みな兄弟』とかいうのも満更じゃないみたいだねえ。」

「だけど今じゃあまりにも色々な人がいて複雑すぎるわ。」

「ほんとに仲良く暮らす事が出来ればそれにこしたことはないんだけどねえ。」

法は、「お義母さん、おやすみなさい。」といって室を出た。発作の事は言わなかった。



法は祖母の新盆で一人故郷に帰っていた。ふと耳を澄ますと神社から太鼓の音が聞こえてくる。

「母さん、神社へお参りに行って来ます。」といってふらりと家を出た。

何人かの人達とすれ違い言葉を交わしながらゆっくり歩いた。丘のふもとの神社の

階段の前に来た。法はふと「一〇三段。」とつぶやいた。高校の時トレーニングに上り下りしたものだった。

中程まで上がったところで上から下りて来た人が肩をポンとたたいて

「法ちゃんじゃないか！」

「あつ、おじさん御無沙汰して居ます」

「父さんがこの間の寄合いで法ちゃんが係長になったってうれしそうに話していたよ。じゃあがんばってな。」

「おじさんも御元気で。」

法は自分には何も言わないのに、とふとおかしかった。

鈴を鳴らして手を合わせていると娘の顔が浮かんで来た。この頃につこり笑うようになったのだ。思わず「恵（めぐ）が健やかに成長しますように」とつぶやいた。

それから神社の裏手にまわり小道を下りていった。夏草がきれいに刈られている。少し歩いて大木のそばの石に腰かけて汗をふいた。蟬の声が降り落ちてくる。ジーと聞いているとふと遠い日の事が思い出された。

あの日もこんな暑い日だった。父と山の下草刈を終えてここで一休みをしている時、

法は思い切って話し出した。

「父さん、先生から進路の事で話しがあつてそろそろ決めなくてはいけなくなつただけど……、僕高校卒業したら働こうかと思うんだけど……。」

父はじつと聞いていて、「どうしてそうしたいんだい？」

「……」

「法、正直に話さんと父さんはわからんぞ。」

法は意を決して「父さん僕、弟や妹が三人もいるし少しでも生活の足しになればと思つて……。」と言つた。

父はしばらく間をおいて、「法、父さんは法のほんとうの気持ちが知りたいんだ、大学へは行きたくないのか、行きたいのか」

「……」

「法、お前は賢い子だからひよつとして自分達弟妹が皆養子で、これ以上私達に迷惑をかけられないと思つてゐるんだつたら大間違いだぞ。わしは法達を母さんと楽しみて育てて来たんだからな。これから人間として真つ当な道を歩いて幸な人生を送つてもらいたいと願つてゐるんだ。それが父さんと母さんの喜びなんだから。お金の心配ならいらんぞ、いざとなりや山や畑はおいしいと思つてなんかいないんだから。」

「……」

「法が大学へ行きたくなければ行かなくてもいいんだよ。だが父さんは思うんだが若いときに学問や色々練成しておく事は、人間に成ってゆく大本（おおもと）だと思うんだがなあ」

「……」

「父さんや母さんに何も遠慮はいらんぞ、法がすれば弟や妹もほんとうの気持ちと言えなくなるからな。」

法はハラハラと涙を落し肩をふるわせて泣いた。そして蟬の声が雨のように降って来るのを聞いた。



立冬、足もとを風が走りぬける。街路樹の木々も少し色づき始めた。今日は一（かず）との話し合いだ、ふうっと溜め息が出た。又暴れるだろうか、唾を吐き散らすだろうか、久々に手にあまる少年だ。だが法の内にはハッキリしている事がある。どれだけ罪があるとも今からその気になれば人生やり直せて穏やかな生活が必ず訪れると。そうなるよう更正させてゆくのが仕事なのだから。

「おはようございます。」と声をかけながら門を入っていった。

午後二時、廊下を大声が響き渡る。

「おれを殺せ、早く殺せ！！」

「静かにしないか！」

面会室のドアが開いて二人の係官にかかえられるようにして入って来た。法の前に来て思い切り椅子を蹴飛ばした。「こら！」と押さえられて椅子にすわらされた。

一は法をにらみつけて「お前におれの気持ちなんかわかるか！」と叫ぶと机を足で蹴り、つばを吐き散らした。

法は「話しなどとても出来ない」とつぶやいて係に頭を横に振り連れていくよううながした。

急に外が暗くなり始めた。『もうじき五時か』ぼんやり外を見ていると仲間内から「父つつあん」と呼ばれている渡辺係長から「一パイ寄っていきませんか」と声をかけられた。

法は「お供します」と言つて二人で外へ出た。

駅の近くの一軒の赤ちようちんの屋台へすわった。暖かい日本酒が体に染み込んでゆく。ほっと溜め息をついた。

「係長、一は手をやかせますねえ」

「ええー。もう内へ来てから二ヶ月にもなるのに落ちつきません。私の力無さです。」

「いやあ、あんな子も時々いるもんですよ」

「……」

「しかし一もひよつとして悪態をつく事で自分を何とかしようとしてがんばっているのかもしれないねえ」

「がんばるですか……、そうだとしてみいっまでもあのようではあの子の体が気になります……。何か気を落ちつかせるものがあるといいのですが……。」

のれんがゆらゆらゆれた。

渡辺係長は法に酒を注ぎながら「そういえばあの子を見ていると時々電車の通る音がしますとね、ジーと聞いていて顔が穏やかになるんですよ」

「そうですか、良く見られているんですね、さすがベテラン係長」

「いやいや私は万年係長、何十年も子供達をみて来ますとそれぞれ色々と発信してくるものがありましたね」

赤い提灯が震えているようだ。

「そうですか。……渡辺係長ちよつと子供っぽいですが一に電車の本でも見せたらどうでしょうか」

「そうですねえ、とにかく何でもやってみますか、何がきっかけで落ちつくかわかりませんからなあ」

「じゃ明日本を出しておきますからよろしくお願いします。」

「たぐいま！」

「おかえりなさい。さあ恵ちゃんお風呂へお父さんに入れてもらいましょうね」

「そうそう今日母が来てね、恵と遊んでいたら寝返りをうったのよ。喜んで喜んでデジカメでパチパチ撮りながらなぜかもう死んでもよいと思うっていうのよ。初孫っ

てあんなふうに思わせるものがあるのかしらねえ」

「もう連れて来ていいよ！」

「ハイ、ではお願いしますね、お父さん！！」

「さあ洗ったから湯につかって出ようね」といいながら子供の無邪気な顔を見ていると何と可愛いのだろうと胸の奥から突き上げて来るものがあり、思わずほおずりをしてしまうのである。

一は最初は電車の本に興味を示したが、その内見向きもしくなってしまうた。一は法の心の奥底に沈みこんでいった。

正月、法は妻の良と恵を連れて故里に帰っていた。今日は神社に初詣に来ていた。良が「お父さんお母さんや皆んなが、あんなに恵の事を喜んで下さるとはほんとに来てよかったわ」とうれしそうにいった。

「あゝ、初孫だからねえ、良もあまり気をつかわなくていいよ。……明後日の朝家に帰ろうね」

鈴の音が一際大きくあたりに響き三人は深々と頭を下げた。

「お祖父ちゃん、今夜はここで寝させてもらおうようにと母さんが言っているので、おじやましますね」といつて離れの室に入ってきた。

「おおー、法と枕を並べられるなんてうれしいね、良さんや恵はどうしたんだね」
「妹達と一緒に寝たいと言って僕は追い出されたのさ」

「アハハ…：そうだったのか」

そのときコトコトと足音がして母が入ってきた。

「おじいちゃん、法、お酒とおつまみ持って来たから二人で適当にやってちょうだい」

「ああ、母さん有りがとう」

法は「さあお祖父ちゃん、おひとつどうぞ」



「うん、ちよつとだけの……ああ、美味しいねえ、さあみのりもお飲み」

「ほんと美味しいね」

「法、仕事はどうだい」

「うん、精一パイやってるよ」

「そうかい……法のような優しい子に仕事は厳しくないのかね」

法はふと一の事を思い出しだまり込んでしまった。お祖父ちゃんは「さあ、寝るとするかなあ」といつて立ち上がるとした。

「お祖父ちゃん、ぼくどうしてよいかわからない少年がいるんだ、聞いてくれる？」

「うん、聞くだけなら聞かしておくれ」

「△という子がいるんだけど、もう半年もなるのに暴れるか、口を開かないか、寝るだけで、医師は特になにもないというし、ぼくもほとほと手を焼いているの。」

「……そうかい。その子はどんな生い立ちだい」

「うん、小さい時親の暴行を受けて施設へ入ったり、親戚の家を転々としたりで中学二年の時飛び出してあちらこちら遊び廻り人を傷つけてしまったのだけど、……そういう子供も今まで何人もいて少しずつ落ちつきを取り戻し、その子らしくなってくんだけど、△はその兆が全く見つからないんです」

「そうかい」

「僕、この頃ふと思うんだけど前に人類の祖先を溯ってゆくと、アフリカの女の人にたどりつくというのをテレビで見た事があるんだけど、その時、直感的に、『ああ！　そうか人間って、話し合えばどんなに難しいと思われる事でも絶対通じていけるんじゃないだろうか』とね」

「どうしてだい」

「うん、理屈ではうまく言えないんだけど、人間としての遺伝子が引き継がれたように親愛の心も皆持っていると思えるんです」

「どうして、そういえるんじやね」

「うん、例えば駅で苦しそうにしている人を見ると知らない人でも駆け寄りたくなるし、その他いっぱいそういう事ってあるじやない。そういう時、誰でも自分をささせる心があり、相手にも心があると無意識に思っただけに自然にするんじやないのかなあ」

「それで」

「うん、その心が△にもあるはずなのにどこにあるかわからないの……やっぱり親とか、社会の影響で△のように心無くしたようになってしまふのかなあ」

「でも同じような子が皆んなそんな子になるってこともないだろう」

「それは、そうなんだけど……」

お祖父ちゃんやんはキセルのたばこに火をつけると美味しそうに吸いながら、「法は今のその子の親の影響と言ったが、親の影響って絶対的なものがあるかのう。法は今親になっただけ親は何していくんだい？」

「そりや恵の為に一生懸命働くよ」

「そうだなあ、わしもばあさんと一生懸命働いて三人の子を大きくしてきたさ、だけど考えてみりやわしのした事なんてたかだか雨露をしのぐ家と、その時々にいる金を用意しただけなんじゃよ。」

「……」

「おばあさんとして、食べるものを用意し、洗濯して掃除していたぐけなんじゃ」

「そうかもしれないけど父さんはそうして育ててもらって立派な人になり、ぼく達四人も引き取って育ててくれたんでしょ」

「そうじやのう、そうやって育ててくれたものを親と言うんじやとしたら、父さん母さんだけが親かのう」

「どういう事？」

「うーん、何と言ったら良いかのう、つまりいまの法を育ててくれたものは他にないのかのう」

「……そういわれれば友達も学校も僕を育ててくれたという事になるのかなあ」

「そうじやのう、近所の人達もその他いっぱいいるわのう。」

……

「ところでみのりの体はどううだい？」

「体？」

「三キロ位の体から今は七〇キロにはなっているかのう、その体と三一年間のエネルギーっていうものを作り成長させ持続させてこれたのはどうしてかのう」

「ええっ！……そりやー米や野菜や魚その他いろいろ食べて育ったけど、……ええ

っ！　確かに僕の体を育てて守ってくれたよね……。ええっ！　鰯や人参が僕の親！」

法はしばらく手をほほに当てじいっと考えた。そして静かに言った。

「お祖父ちゃん、じゃ、太陽も、雨も、風も、川も、海・山・大地全部、親に視えるよ。そして今も育て、守ってくれているっていうこと？」

しばらくして呟いた。

「みんな僕を育て守ってくれているのだ。傘だって雨から、コートだって寒さから。」

そして学問や文化、その他諸々の有形・無形のものを受けて育ててもらい人間らしくなろうとしているのだ。」

そう言うときと空（くう）を見つめ、つぶやいた。



「そうだったのだ、人間を含め宇宙自然界の働きは『愛』なのだ。『何と広大無辺の愛』なのだろう」と思ったとたん、体中に電流のようなものが走り、法の目からハラハラと涙が落ちた。

たばこの煙をフウと吐くと「わしは難しい事はわからんが宇宙自然界がわしをす

つぱり包んでくれているのう、まあ時には厳しい事もあるが春のように暖かいのじゃ。それが心地良く親のように思えているのう。わしは八〇を過ぎても自然の子供じやと思つて暮しているんじや、それが楽しいんじや、幼子のようになあ……アハハハ……」

法も思わず笑い「じゃ、僕も死ぬまで自然の子供でいられるね」

「それからさつき法が話してたもう一人大事な親、アフリカの母さんの事なんだが、母さんから生命は切れる事なく恵まで繋がって来ているという事実はあるわのう。その事はその間生まれて育ててもらい親になり、くり返しくり返し法まで来た事を思えば御先祖様に感謝感謝だ。どこか一ヶ所でも切れてたら法はこの世に出現出来なかつたのだからのう。そういう所から見たら今は網の目のように繋がっている人間社会の全ての人に対して親であり、兄であり、弟であり、孫であり、どんな身替りもさせてもらえるわのう。」というのと、キセルの灰をトントンと落し

「それにもう一つ、別の見方からしたら今地球上では六〇数億の人間が生きているが同じ人はいないように見えるわのう。だがその異いこそ大事なことよのう。わしはその一人一人の異いが人体の細胞のように視え合わさつて、完全な一体の“人間”と言えるものを顕わしているように視えるんじや、つまり、地球上で人間と言えるのはこの一体の人、一人だけなのじやないかとな。」と言いながらキセルに又たばこをつ

め美味しそうに吸いながら、

「今はまだ戦争、飢餓、病気等いっぱい不幸な事が起っているわのう。まあ一人の人間でいえば手足に傷を負い、胃に穴があき、頭脳の働きもまだまだで、心も時々憂うつになっているとかのう。だがわしは悲観してないんだ。人間には頭脳がある。知恵がある。愛がある。法も憶えがあるだろう、ちよつと足を擦りむいてもしばらくすると治っているのを。体全体で治そうとして治していくのを。人はきつと無意識の内に健康正常な方へ向かおうとする力があるように思うんじや、だから難しい事ではない、自然にそうなっていくだろうのう。」

「何千年も出来なかった事が出来るのだろうか」

「うんそうじやなあ、人間には頭脳がある。このまま科学その他の研究・技術が進めば、ある時から人口も減少し、物は世界中に行き渡る日が遠からず必ず来ると思う。問題は心の世界じやのう。」

そう言うのと、まるで自分に言い聞かせるようにして言った。

「まず最初は、自分自身が安らかになる事。つまり一個の細胞が健康正常になる事。他人様の事はわからん事がほとんどじやのう。だが自分が自分の心の内を視るのだから、何故腹を立てたのか、何故悲しいのか、一番良くわかるわのう。だが思い込んだ

り、思い違いなどしているとそれが個性のように錯覚したりして、なかなか自分でも視えん事が多くてのう。だが案外、他人様の方がよく視ていて下さったりする事もあるのう。そう思えたら他人様に言ってもらえたら頑固な考え等、ポイポイ捨てて身軽になつたら良いわのう。又、別の方法でよく講習会とか研修会とか色々あるわのう、そういう中で自然界の理に気づいて、いやな自分の考えをポイポイ捨てたら軽う軽うなるわなあ。

そして心が幸になつた者はその分自然に他の人に心の手を差しのべてゆくものさ。親愛の情かのう。そして互いに物心共に幸になつてゆく。つまりそういう人達から社会組織を変革して不幸の人のいない社会愛社会を出来る所から創つてゆく。そしてその幸な生き方を子供に繋ぎ、いつの日か全ての人が幸福人になり、健康正常で完全な『地球人間一体の人』が出現したとき、その細胞の個々の人間は安息の内に、真の自由を得、子供が遊ぶように楽しく暮せるようになるんじゃないかろうかのう。」

法は呆然と聞いていた。

「お祖父ちゃんはどうしてそう思えるようになったの？」

「まあ、少しの本やら、人の話しやら、自然の営みの内で活かされて生きているとそう思えるのじやが。わしや、自然の子じやからのう。アハハハ……。わしの話もど

んなもんかわからんわからん。わしは初夢の話しでもしたのかのう。アハハハハ……。」

法は庭に出た。上気した顔に寒気が心地良い。何と広い夜空、何と美しい星々、赤、青、黄色、白い光が次々と通り越してゆく。自分は浮遊しているのだろうか。

「法、法、もう酒はいいの！」母の声にハツと我に返った。

松の内も過ぎた頃、一との面会が近づいて来た。法はああも言おう、こうも言おうと祖父との会話を思い出しながら考え続けていた。そして、その日の午後二時と決まった。ふと窓をみると雪が降って来た。風の中を右へ左へと揺れながらまるで白梅が舞っているようだ。美しい。

「係長、一を連れて来ます」

「はい」とうなずき面会室へ向かった。

大声がだんだん近づいて来る。室へ入って暴れ、椅子を蹴飛ばしながらようやく座らされた。法は一の顔をジイーと視た。

「この子は一体の子、私は兄、一は弟」とつぶやいた。

法はそれを聴いたとたん体が震え滂沱の涙が溢れ止まらなくなった。一は悪態をついていたが静かに一、一、と泣き続ける法をみて次第におとなしくなり、その内、身を震わすと「ママー！」と呼んで机にふれふし大声で泣き出した。

法は一の肩を両手で抱いて「一緒に生きてゆこうな、一緒に生きてゆこう」と何度も言った。



「お父さん！お風呂の用意が出来たわよう！」

「ハイハイ」

「今日は初雪も降って寒いからしっかり暖めてね」

「ハイハイ」

湯船でキャツキャツ喜ぶ娘を見ながら法は額をくつつけ「恵、おまえはどここの細胞になるんだろうネ、一体を動かすものは頭でも足でもどこでも一役。差などあるはずはないんだよ。おまえが楽しく出来るところをやらせてもらいなさい。わからなくなったらまわりの人に見てもらって合うところを見つけないさい。きっと楽しく生きてゆけるからね」

「お父さん！いつまで入っているの、恵がのぼせちゃうでしょ！」

「ハイハイ」

完

二〇〇九・三・二五日